

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 山中 由里子

山中由里子氏の博士学位請求論文「寓意としてのアレクサンドロス—イスラーム古典期の信仰と歴史意識において」は、表題にある「イスラーム古典期」（山中氏はそれを7世紀のイスラーム台頭から、西アジア制覇を経て、13世紀半ばのアッバース朝滅亡までの時期とする、と定義している）において、アレクサンドロス大王をめぐってアラビア語、ペルシア語、パフラヴィー語で書かれたさまざまな分野のテキスト（歴史資料から文学作品までを包摂する）を分析し、それらのテキストを通じて「人々がアレクサンドロスという人物に何を見出し、何を投影してきたか」を個別に考察したうえで、それらのテキストが見せる言説の様相を総体的に把握しようとするものである。

これを行なうにあたって山中氏が採用する方法は、歴史的に生成されたテキスト群からアレクサンドロスに関する歴史的真相を批判的に抽出するという先行研究に多く見られるものとは異なり、それらのテキストがそれぞれの時代あるいは地域においてどのような意味を負託されていたかを析出し、それを比較論的に考察しようとするものである。この方法を山中氏は「寓意解釈」あるいは *allegoresis* と呼んでいる。この点に関しては、審査冒頭に、山中氏から口頭で補足説明があり、審査員との間に質疑があった。

山中氏の論文は3章より成り、これに「序論」と「結論」が付けられている。全編を通じて、各章で考察の対象となるテキストに関する膨大な先行研究（その多くが個別テキストの本文校訂、テーマ分析、歴史的考察、など特定のテーマ設定と方法論に拠るモノグラフである）を精査し、それらを踏まえ、あるいは批判しながら、山中氏は独自の総合化に向かう分析と考察を進めて行く。特に、イスラーム世界において造形されたアレクサンドロス像のなかに相互に異なる側面が存在することに着目し、その側面を一つ一つ取りあげながら、本論文の全体構成のなかで、それをイスラーム世界固有のアレクサンドロス受容、即ち寓意解釈の多様性として示そうとする。

テキストのなかに語り出されるアレクサンドロスが示すその多様な顔のうち、山中氏がかもっとも重要なものとするのは、信仰と歴史意識に映し出されるそれである。前者は第2章で「預言者」としてのアレクサンドロスとして、後者は第3章で歴史的規範あるいは伝説的英雄としてのアレクサンドロスとして論じられている。それに先立つ第1章においては、イスラーム世界におけるほぼすべてのアレクサンドロス物語の源泉テキストともいえる偽カリステネス「アレクサンドロス物語」の諸写本の成立と系譜、その内容と本文の異同が詳細に論じられている。

本論文は本文・注を含めて40万字をゆうに超える大著である。さらに、偽カリステネス「アレクサンドロス物語」写本に関する系譜及び校訂・注釈に関する完璧なビブリオグラフィ、本論文中に言及される原典資料の、ギリシア語、ラテン語は言うに及ばず、パフラヴィー語、アラビア語、ペルシア語の校訂・翻訳文献、本論文では分析の対象とはならないがヘブライ語、シリア語などの同種文献に関する詳細な目録が付録されており、これは本論文の価値を高めるとともに、背後にある山中氏の十数年にわたる研究の蓄積を如実

に物語っている。

以下、本論文の構成に即して、各章の内容を概観し、審査委員の評価乃至批判を随時記しておく。

第1章は、「アレクサンドロスに関する知識の源—古代世界からイスラーム世界へ」と題され、まず源泉テキストとして位置づけられる偽カリステネス「アレクサンドロス物語」写本の生成、伝播が考察され、その概要が記述される(第1節)。それを補足する形で、アラブ世界において重要な意味を持つようになる「アリストテレス書翰」(偽撰とされる)についての分析(第2節)、偽カリステネス写本とは異質の要素を含む「イスラーム以前のイラン」におけるアレクサンドロス伝承とパフラヴィー語ゾロアスター教文献におけるアレクサンドロスが考察され、そこにペルシア独自の内容が盛り込まれている(山中氏に拠れば「過去の捏造」)ことが指摘される。本章は、第2章、第3章の考察を支える基礎部分であり、先行研究の成果の紹介とそれに対する山中氏の批判的考察によって論述されている。この章に関しては、資料(特に関連地図)に関して、また史料の解釈に関して、審査委員からいくつかの疑義が示されたが、すべて細部の補正を促すもので、論述の本旨に触れるものではない。

第2章は「預言者アレクサンドロス」と題され、まず『コーラン』第18章「洞窟」82-97節に書かれている「二本角」と呼ばれる人物が考察の対象となり、シリア語キリスト教伝説と対比されながら、それがアレクサンドロス伝説と融合してゆくプロセスが追跡される。これがイスラーム世界独自のアレクサンドロス神聖化の基点をなしているのである(第1節)。続いて、タバリー『タフシール』からニザーミーのアレクサンドロス物語に至る四種(他の二つはサアラビー『預言者伝選集』に代表される預言者伝とディーナワリー『長史』)の著作を順次取り上げながら、多くのテキストの引用と分析を通じて、預言者アレクサンドロスの造形が完成されてゆく過程と様相が論証される。本章は、本論文の独自性を最もよく示すものであり、多くの新しい知見が示されており、イスラーム研究に新境地を開くものであるとの評価がなされた。

それに続く第3章は「歴史の中のアレクサンドロス」と題され、イスラーム歴史学の展開のなかでアレクサンドロスがどのように描かれてきたかを考察しようとするものである。その際、アリアノス、プルタルコスなどの古代ギリシア・ローマの歴史書がイスラームの歴史記述にほとんど影響を与えなかったこと、従ってイスラーム世界の歴史書に現れるアレクサンドロス像は、もっぱら第2章で考察された偽カリステネスの諸写本や「二本角」伝承を伝える宗教文献を主たる源泉とし、それに時にはササン朝ペルシアの政治・宗教的立場を反映するアレクサンドロス像が関与していたこと、つまりそれがイスラーム歴史学固有の課題と深く関係していたことを山中氏は指摘している。この立場から、「ハディースの時代」と定義される初期アラブ歴史学(第1節)から、世界史的展望を持つようになる全盛期のイスラーム史学(第3節)、さらにはイスラーム世界の東方拡張に伴ってそれぞれの地方色を持つようになるブワイフ朝、カズナ朝の歴史記述(第4節)に至るまでの多種多様な歴史文献が博搜され、分析の対象とされる。その結果、大きな差異や偏差を超えて、アレクサンドロスが各時代・各地域のイスラーム王朝の理念を表象するものであったことが論証される。

この第3章は本論文の半ばを占めるスペースを配当されている。その結果として、個別

の論述の力強さは評価できるが、記述の濃度に全体として均質性を欠き、また第2章の論旨との関係性が見えにくいこと、また引用テキストの原文掲載が一部のみに行なわれるというような形式的整合性を欠いていること、などの問題点が審査委員から指摘された。しかしながら、質疑応答の一つ一つが真剣かつ濃密な学問的対話となっていたことも事実であり、それは本論文の稀に見る質の高さを証明するものであった。

アレクサンドロス物語を対象とする本論文に類似の総合的研究としては、中世ヨーロッパに関して既にジョージ・ケアリー『中世のアレクサンドロス』という古典的著作があるが、本論文はその「イスラーム世界編」とでもいふべきものを目指すものである、と山中氏は序論で表明している。事実、本論文において展開される考察は、この野心的な目標に見合う構想を持ち、本論文が我が国のイスラーム研究を大きく前進させる成果を示していることは、審査委員全員が等しく認めることであった。

総合的にみて、イスラーム世界において歴史的に蓄積されてきたアレクサンドロス文献群総体の寓意解釈論的読みという新しい課題に挑戦し、具体的なテキスト分析を通じてその課題を達成した本論文は、単にアレクサンドロス研究に新しい寄与を為すばかりでなく、歴史的事実とは別の次元に構成される物語言説のより広範な研究にも貴重な貢献を為すものとして高く評価されること、また本論文の明快な論述と具体的な分析は、山中氏の研究者としての高い見識と研究能力を証明するものであること、それが審査委員全員の一致した結論であった。

論文査読と口頭試問の評価に基づき、本審査委員会は慎重な審議の結果、全員一致で、本論文が山中由里子氏に博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。